「銀河鉄道の夜」最終形の生成と「〔或る農学生の日誌〕」

――夢・現実・軌道の交錯――

栗原　敦

はじめに

生成転化を続けて、未完成とはいえ一つのまとまりを見るところにまで至った「銀河鉄道の夜」最終形だが、その生成の秘密を解き明かすために、未完のままに放置されることになった「〔或る農学生の日誌〕」を重ねて検討してみようとするアプローチは、管見の限り、これまでになかったのではないかと思う。徹底して地上の稗貫郡を舞台とし、歴史的実在の時間で枠組み、宮沢賢治自身の花巻農学校時代を客観化する眼差しをも含んだ「〔或る農学生の日誌〕」執筆の試みとその中絶は、「銀河鉄道の夜」の初期形から後期形（～最終形）へと深化させたものが何であるかを解き明かすのに十分な材料を与えてくれる。

先ずは、幾つかの大切な素材・モチーフの出現や変貌の行方を検証し、賢治後半生の歩みを照らし合わせて、最終形生成の意義を明らかにしよう。ただし、あらかじめ述べておけば、あくまで、作者宮沢賢治の現実を背景にするとともに、一見するとリアルな歴史的時間の中に枠付けようとしたかの如き「日誌」世界を構成し、結局書き通せなかったひとつの作品世界と、作中人物を地上を離れた銀河の天上世界に旅立たせつつ、それを地上の現実的生活世界に連結させながら着地させることになったもうひとつの作品世界の間をつなぐ、表現の生成過程・表現行為の意義を究明するのが目的なのであって、作品舞台や登場人物を実在の場所やモデルに引き寄せて説明とするモデル論議などを意図するものではないのである。

1、「銀河鉄道の夜」の着手時期とその内容、各次稿の概観

「銀河鉄道の夜」の草稿の最初の着手時期は、厳密にはわかっていない。しかし、入沢康夫が『「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて』（97年3月、宮沢賢治記念館）の「解説」で適切に要約しているように、「おそらくは一九二四（大正一三）年の秋から冬にかけてであったろうと推定でき」、「《着想は一九二四年の夏で、着手はその秋》というあたりが、おそらく正しい答ではないだろうか。」ということであろう。当初の内容についても、菊池武雄の証言（「『注文の多い料理店』出版の頃」）の要約、読んで聞かせる際の「どんなのだス」／「銀河旅行ス」というやりとりや堀尾青史の『年譜宮沢賢治伝』（図書新聞社、１９６６・３）から引用紹介した、「のちの作品は学校の授業からはじまり活版所で働くジョバンニが描かれているが、そんなのはこのときはきかなかった。いきなりケンタウル祭の夜からはじまっていたように覚えている」などが手掛かりになるだろう。もちろん、この証言はあまり確実ではなく、「いきなりケンタウル祭の夜からはじまって」がどのあたりを指すのかも定かではないが、何らかの手立てで「銀河旅行」に旅立った、その旅行が中心だったと感じさせるふしはあるようだ。

現存する草稿の、各次稿の詳細をたどることはここでは省略し、かつて「銀河鉄道の夜」〔初期形一～三〕と最終形の概要を紹介したことがある（「国文学」２００３・２臨時増刊号）ので、それを修正して、まず「あらすじ」を紹介し、続いて注目すべき要点を再整理して以下に示しておこう。

〔初期形一～三〕の「あらすじ」――〔初期形一〕（原稿ナシを承けて）ジョバンニ、カムパネルラ、女の子と弟、青年らは「青い橄欖の森」を過ぎ、銀河鉄道の旅をつづける。サウザンクロスで女の子たちが降り、また二人きりになったジョバンニとカムパネルラはどこまでも一緒に行こうと言い合うが、カムパネルラの姿は消えてしまう。「ほんたうの幸福」を求める新たな決意を叫ぶジョバンニにセロのやうな声が聞こえ、次いで夢の旅は実験だったことがブルカニロ博士によって明かされる。〔初期形二〕には、〔初期形一〕の前にジョバンニの切符、鳥捕り、女の子たちの乗車の理由（海難）などが配されている。「ケンタウル祭の夜」で始まる〔初期形三〕は、ジョバンニの境遇、夢の旅に入るきっかけ、銀河観と銀河鉄道への乗車の経緯、旅のはじめを示す部分をおいて〔初期形二〕に続き、旅の細部やエ

ピソードもいっそう詳しく書き込まれる。下車する青年たちとジョバンニの間に「ほんたうの神様」を巡る論争があり、カムパネルラを失って泣くジョバンニに語る黒い大きな帽子の大人の教えや諭しが挟まれている。

ジョバンニが「さあもうきっと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネルラのためにみんなのほんたうのほんたうの幸福をさがすぞ。」と決心すると、セロのやうな声が「切符」の意義を諭し、ジョバンニは「まっすぐ草の丘の上にいる」ことに気づく。むこうからブルカニロ博士が近づき、全ては博士の思考伝達実験だったことを明かし、お礼とともに「さっきの切符」を渡して、天気輪の柱の向こうに見えなくなる。丘を下りるジョバンニはポケットの「天の切符」の中に二枚の金貨か包まれていることに気づき、博士に感謝しつつ、母のもとに走って行く。

作品冒頭が残されていない〔初期形一〕と〔初期形二〕(以下〔一〕〔二〕と略記)だが、重なる部分について質的な違いはほとんどないといってよい。〔二〕のはじめは、車掌から検札を求められたジョバンニが困惑して「上着のかくし」に手を入れると、紙切れに気づくというところ。「四つに折ったはんけちぐらゐの大きさの緑いろの紙」は「鳥捕り」から「ほんたうの天上へさへ行ける切符」「天上どこぢゃない、どこでも勝手にあるける通行券」だと感心される。ジョバンニがその点で選ばれた者であることは確かだが、思い当たるふしがない彼にとっては偶然としか思われまい。しかし、女の子たちがサウザンクロスで下車しようとするときには、「僕たちと一緒に乗って行こう」と誘うのに加えて「僕たちどこまでだって行ける切符持ってるんだ」といい、それは(あなたがたがいま降りようとする天上より)「もっといゝとこへ行く切符」ともいい換えられて、切符が自分たちのものであることが積極的に受け入れられているのである。末尾では、「あのセロのやうな声」が「切符をしっかり持っておいで」と命じ、「天の川のなかでたった一つのほんたうのその切符」といい、すぐにブルカニロ博士が自分の「考を人に伝へる実験」で「夢の中で決心」をさせたと明かし、しかも「さっきの切符」といって「小さく折った緑色の紙」を実際に渡す。「セロのやうな声」は「あの不思議な低い声」の形で〔一〕から登場しているが、初期形の夢と現実を貫く仕掛けは、こうして「セロのやうな声」の主は実験者ブルカニロ博士であることを示して、その彼が与える認定証、資格証である「切符」が「ほんたうの幸福」を求めてどこまでも行くことの正しさを支える根拠だと主張している。

〔初期形三〕がブルカニロ博士の実験と「切符」の威力

に貫かれている点は、〔一〕〔二〕と変わらない。夢から覚める前の「あのやさしいセロのやうな声」・「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の痩せた大人」は、ジョバンニにこの旅で経験したことの全てを総括するような、「あらゆるひとの一番の幸福」をさがす世界認識のあり方について長々と語りさえしている。とはいえ、〔三〕には、〔一〕〔二〕に異なるかなりの点も見られるのである。その第一は、「ケンタウル祭の夜」で、町の坂を下りるジョバンニがザネリに冷やかしのいじめ言葉を投げかけられ、今の境遇を顧みることなどから読者に彼の環境が伝えられたこと、第二に、みんなにはやしたてられて孤立し、逃げるように「天気輪の柱」の丘に行き、カムパネルラの友情を求める切ない思いを描いて、地上から天上への夢の飛躍が根拠づけられたこと、である。ジョバンニの切符は〔一〕〔二〕と同様に特別の意味を与えられているが、以上のようなことが書き込まれていることによって、選ばれた者としての旅というよりも、旅の中でジョバンニが何を発見して行くかが探られる物語としての性格を強めることになるだろう。〔一〕〔二〕から〔三〕へと変化する点をいくつか指摘しておく。

「ジョバンニの切符」の章で多くの手入れが加えられたのは、船の遭難にあった姉弟たちのエピソード。姉弟の人数の変更に伴う改変も少なくないが、重要なのは付き添っていた家庭教師の青年の体験談である。〔二〕では遭難の経緯の骨格だけが示されるが、〔三〕になって初めて保護する姉弟を助けようとして救命ボートに押し出すために周りの他の「子供ら」を押しのけるか、それを止まるか、どちらにも揺れた苦しい心の告白が詳しく展開されるのである。話を聞くジョバンニの感想も、〔二〕では北の海で苦労している父とそれを心配している母への思いに直結し、そのためどうやってここから帰ろうかと考えて「ふさぎ込む」。「セロのやうな声」が「いつでもその切符で帰れるから」心配いらぬと救いの言葉をかけると、すぐに「愉快」になるという幼さである。しかし、青年の体験が二律背反する状況の下、単純な善悪で振り分けられないところにまで踏み込むことになった〔三〕においては、ジョバンニの思いも、救命ボートを漕ぐ水夫からの連想が「北のはての海で」「一生けんめいにはたらいてゐる」「たれか」にたどり着き、「そのひとにほんたうに気の毒でそしてすまない」気がすると感ずるのである。いわば意識の深層部には自分の父が潜められていながら、単純にそこに止まることなく、同様の多くの人たちにまで思いが及ぼされている。これは、より高められた倫理的感情のレベルというべきなのであって、ジョバンニの倫理観はその域にまで届いたものになっている、といっていい。〔二〕と〔三〕の間における「切符」・「セ

ロのやうな声」の役割の質的変化も、これによって量ることができよう。

最後にもう一つ、カムパネルラとの別れの場面の違いについてだけ確かめておこう。〔二〕のジョバンニは、「きっとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一諸に進んで行かう。」と言い合ったカムパネルラが突然消えてしまったとき、立ち上がり、窓の外に乗り出して、激しく胸をうって「さあ、やっぱり僕はたったひとりだ。きっともう行くぞ。ほんたうの幸福が何だかきっとさがしあてるぞ。」と叫ぶ。ジョバンニの雄々しい決意の表明だが、気持ちの切り替えがあまりにもドライである。これに対して、〔三〕では、激しく胸をうって叫び「それからもう咽喉いっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになったやうに思ひました。」と描かれている。ジョバンニの悲しみは激しく、深い。それはカムパネルラの友情を切なく求めていた冒頭以来の人物造型に見合うものになっている。最終形におけるジョバンニがより深く自立する少年像へと進んでゆくためにも、〔二〕の単純さを超えた〔三〕でのこの悲しみにくれる姿の獲得は必要欠くべからざる段階だったのだと思われる。

最終形の「あらすじ」――先生から銀河の授業をうけたジョバンニだが、漁に出て連絡が途絶えている父のため、病気の母を抱えて朝も午後もアルバイトに追われ、みんなと親しく交わることもできない。銀河のお祭りのこの夜、配達されなかった母の牛乳を取りながら祭を見に行くが、帰らない父を種に子どもたちにはやしたてられ、逃げるように天気輪の柱の丘に向かう。

悲しい気持ちで空を見上げるうちに、「銀河ステーション」という声を聞くままにいつの間にか鉄道に乗車していたジョバンニは、心の通い合う同級生カムパネルラと一緒に、知らぬ間に手にしていた不思議な切符を持って銀河を旅することになる。北十字とプリオシン海岸からサウザンクロスまでの間に様々な人々と出会い、別れながら、諸々の心の体験をして「ほんたうの幸」を求める決意をするが、空の石炭袋が見えるあたりで突然カムパネルラがいなくなってしまう。

目をひらいて、眠っていたことに気づいたジョバンニは、牛乳屋で母の牛乳を受け取り、大通りを行くと、川での異変を知る。川に落ちたザネリを助けたカムパネルラが流されて行方不明になっている。カムパネルラの父の博士に、「カムパネルラといっしょに歩いてゐたのです」と言おうと思うジョバンニだが、のどがつまって言うことができない。カムパネルラの父はジョバンニを見て、彼の父が帰る

ことを知らせ、また明日の集いに誘う。何も言えないままにジョバンニは別れ、一目散に家に向かって走る。

四次稿（最終形）によって獲得されたことは何か（〔三〕との差異は何か）について、まず検討しておきたい。ジョバンニの銀河への旅がブルカニロ博士の実験だったことが明かされる〔三〕においては、夢の中での説明の声、導き役、いわばジョバンニより高い審級に立つものが「セロのやうなごうごうした声」、「あのセロのやうな声」、「あのなつかしいセロの、しづかな声」、「いままでたびたび聞えたあのやさしいセロのやうな声」、「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の痩せた大人」として登場する。それは、少年のジョバンニが出会う理解できない状況や難問にたえず目配りしていて、タイミング良く介入して解答や解決の方向を与える働きを果たしている。それゆえ、ジョバンニは、時に楽しく、時に切なく、また深刻で複雑な思いに迫られる、実に豊かな体験をした銀河の旅の行為者・思索者主体でありながら、結局は上位の審級に支配された傀儡だったことにされてしまう。博士は「私はこんなしづかな場所で遠くから私の考を人に伝へる実験をしたい」と考えていて、それが今実現したと見なしていた。ジョバンニに「夢の中で決心したとほりまっすぐに進んで行くがいゝ」と勧め、導いたのだった。

ブルカニロ博士の実験が夢の根拠だった〔三〕と異なって、最終形ではジョバンニの銀河の旅はジョバンニ自身が置かれた実存的な状況、現実生活のさまざまな絡み具合が目に見えない全体的な力となって、丘の上で彼を天上に旅立たせている。天上の旅からの帰還が「ジョバンニは眼をひらきました。」と目覚めによって示され、これまで「つかれてねむっていた」と説明されたことから遡って、読者にとっては、はじめてそれまでの銀河鉄道の夜の旅がジョバンニの眠りの中での出来事、すなわち夢の中の出来事であったと理解されるようになっている。そして、問題は、それではジョバンニはこの、理性的に考えれば「夢の中の出来事」として認めなければならない体験を、目覚めた地上の現実とどう関連づけているのだろうかということなのである。これは、最終形の末尾に描かれた、カムパネルラの父を前にして「のどがつまって何とも云へ」ない、「いろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云へ」ないジョバンニの内心をどう理解するかに関わってくることであるが、これについては次章を検討してからもう一度考えることにしよう。

いずれにせよ、「午后の授業」は、ジョバンニが生きる町の現実的制度のもとにあって、教科内容としての理科の

知見を提示し、あわせてジョバンニを「気の毒がって」同情してくれた（そのようにジョバンニが確信する）カムパネルラを描いて、夢の銀河に飛び出す発射台が現実の生活共同社会に据えられていることを語っている。「活版所」でのアルバイトもジョバンニの町における現実生活の描出だし、〔三〕において、ザネリのはやしことばによるいじめにあったとき、ジョバンニが内心で反芻していた父の無実の説明や病気と困窮の中にいる母への同情は、最終形では、母とジョバンニが交わす会話のことばの中に表れるように変えられて、「家」というひとつの独立した現実的場面を形成している。母と子が互いを思いやりながら、同じ現実に向き合っている姿は、〔三〕におけるジョバンニの孤立感や寂しさ、困窮に陥った引け目や嘆き、つらさの表現の多い描き方との大きな違いだろう。ささやかな登場とはいえ、ジョバンニと母の生活に心を配ってくれている姉の存在の描出も貴重なものなのである。〔三〕において、現実逃避の感情と、「級長」カムパネルラを同行者に求める憧れが強調されているジョバンニの内心が、最終形冒頭の「午后の授業」でのカムパネルラ（「級長」の語は登場しない）の振る舞いに対するジョバンニの反応（友愛への申し訳なさ）に置き換えられていたのも、ジョバンニが立たされた、現実生活上の状況が彼にもたらす精神的、実存的意識、つまり深層心理を起点にして彼を天上へと運んだことを示すものだったと見てよい。

要するに、〔三〕の枠組みは、何らかの理念を前提にして、現実の制約や不如意から相応に自由になれる銀河の旅において、ブルカニロ博士がすでに持っていた「考」えをジョバンニの体験を通じて受けとめさせる実験にあったのだが、最終形の枠組みは、読むものにジョバンニにとっての現実の町の暮らしと銀河の旅が二重に重なり合い、互いに拮抗し、干渉し、交錯しあう姿自体を示すことになった。だから、ここからは作者の理念とその表現のあり方の行方を、作中で話題とされた観念、主張、議論の主題、象徴的事物、小道具等に即して、もう一度追究しなおすことが必要になる。以下、次章でそれを検討することとする。

なお、作家論的視座に眼を転じて、次のことだけ示唆的に付記しておくことにしよう。たとえば、この作品は「星めぐりの口笛」や「双子のお星さま」を取り込んでいる。周知のように、賢治童話の「双子の星」であり、そこにも登場し、賢治歌曲として知られる「星めぐりの歌」のことである。また、「プリオシン海岸」での発掘は、稗貫農学校教諭時代の伝記的事項にあり、「イギリス海岸」にも描かれた出来事が、天上の銀河の出来事に移し替えられたものである。「ほんたうの幸」の話題も「学者アラムハラド

の見た着物」や「ひかりの素足」等で繰り返し取り上げられた。「苹果」には多くの注目が集まっていて、見田宗介（『宮沢賢治』84・6、岩波書店）、天沢退二郎（『エッセイ・オリニック』87・6、思潮社）、萬田務（「『銀河鉄道の夜』考―〈苹果〉をめぐって―」「解釈と鑑賞」93・9）などの考察もある。こういった意味で、「銀河鉄道の夜」が、宮沢賢治にとっての、一種集大成的な側面を持っていることは否めないのである。しかし、もしそうならば、彼の表現の営みはいくつかの原型的要素に還元されて終わるということになるだろうかといえば、けっしてそういうことではありえない。たとえば、ジョバンニの「切符」。その由来を求めて、緑色だった国柱会の「天業民報」や紙製の「曼陀羅」を指定する見解があり、それらが作者の発想源の重要なひとつであり得たことは認められることだが、それを確認した上で、作品の表現的事実としては、ついに特定の固有の名称に集約されることがないように賢治が書いていたこと、その働きがもたらす意義を考えることを忘れないようにしたいということなのである。

2、「〔或る農学生の日誌〕」と「銀河鉄道の夜」

①「いるか」と「お守り」

前出の入沢康夫「解説」には、「銀河鉄道の夜」の〔初期形一〕から最終形にいたるモチーフや主要エピソードの推移を見渡すのに好都合な「各次稿における主要なエピソードの有無（カッコ内は推定）」という一覧があった（104頁）。「エピソード」の項目は「学校・印刷所・家」「星座早見の詳細」「ブルカニロ博士の登場」「難船した姉・弟の人数」「セロのやうな声」「いるか」「本当の神様」「黒帽子の大人」「ブルカニロ博士の再登場」「カムパネルラの死を知る」の十項だった。「〔或る農学生の日誌〕」は、「銀河鉄道の夜」との直接的な異稿関係にあるわけではないが、「いるか」に関しては項目を共通している。これを最初の糸口としてみたいが、その前に、まず『新校本宮澤賢治全集』第十巻の校異篇の記述から摘記して、作品を概観しておくことにしよう。

「〔或る農学生の日誌〕」（表題は、かつての慣行に従った仮題）

わら半紙二十五枚に記された草稿として残されている。途中数カ所および末尾に若干の欠落あるいは未完状

態がみられる。「農学校の三年生になったときから今日まで三年のぼくの日誌を公開する」とされた「序」をもつ。「ぼく」の名前は表れないが、「小舟渡の北上の岸」、「朝日橋」等の地名から、花巻周辺が舞台であることは間違いない。「一九二五、四月一日」の新学期からはじまり、「一千九百二十七年八月廿一日」の記述で終わっている。なお、「丸善特製　二」原稿用紙三枚に書かれた本作品メモ（構想案）がある。

〔あらすじ〕

（「日誌」なので、あらすじにはいささかなじまないため、主な話題を摘記しておく）

序（「ぼくは農学校三年生になったときから今日まで三年の間のぼくの日誌を公開する」）。「一九二五、四月一日　火曜日　晴」（というように「日誌」の形を取って記述）農学校の三年生になった新学期の様子。実習。実家の仕事。学校の行進歌への感想（「四月九日」で空白）。「一千九百廿五年五月五日」桜の花への感想。「五月六日」以降「五月十四日」まで三年生の修学旅行の話が続く。家計の状況と工面が難しい旅行費用。一定数以上参加しないと補助金が下りないので、参加要請と自家の費用捻出との板挟みに苦しめられる。「一九二五、五、一八、」修学旅行記事。「一千九百廿五年十月十六日」秋、修身の講義への疑問。土性調査の実習。「一九二五、十一、十日」球根をめぐるエピソード。「一千九百二十六年三月廿〔一字分空白〕日」春、塩水撰。「一千九百二十六年六月十四日」樋番。翌年「一千九百二十七年八月廿一日」稲の倒伏。

およそ以上のごとき内容をもっているが、見ての通り一九二五（大正十四）年四月は宮沢賢治が翌大正十五年三月に花巻農学校を退職することになる、四年数ヶ月にわたった稗貫・花巻農学校教諭時代の最終学年に当たる。一千九百二十七（昭和二）年八月は、農学校退職後、下根子桜の宮沢家の別宅を改装して、ひとりの農民として肥料設計相談と農村の生活と文化の改善を志して運動を展開した、所謂羅須地人協会活動の期間にあたる。昭和二年も天候不順で、多雨、低温、旱害なども繰り返し、凶作の年であった。ちなみに、賢治が、過労からくる発熱、肺炎などによって倒れるのはその翌年、昭和三年の夏のこと、一時は回復したかに見えたが十月以降再び病臥、実家で昭和五年までの長い闘病生活に入って、羅須地人協会活動は中絶を余儀なくされたのであった。

「〔或る農学生の日誌〕」では、「序」に「三年の間」の「日誌を公開する」と記すが、現存する期間は二年四ヶ月の範囲で中絶し、その間もかなりの空白、あるいは省略の期間

が挟まれたままである。地名から推測して花巻農学校の生徒だと見られる。現存する草稿に記述はないが、当時は三カ年で卒業だから、昭和二年三月に卒業したはずである。

さて、先に指摘しておいた「いるか」は、五月十四日になってようやく行かせて貰えることになった、三年生の北海道修学旅行の「五月十九日」の記述に登場する。

「いるかの群が船の横を通ってゐる。いちばんはじめに見附けたのは僕だ」にはじまり、「何か黒いもの」の描写、「先生も何だかわからなかったやうだったが漁師の頭らしい洋服を着た肥った人があゝいるかですと云った」という表現には、「銀河鉄道の夜」〔初期形一・二〕の表現と近しい所がある。

もちろん、「いるか」の出現あるいは北海道修学旅行には、賢治作品とその伝記の中に先蹤があって、例えば『春と修羅』収録の北海道・樺太旅行を題材とした「オホーツク挽歌」群の関連作品、「一九二三、八、一」の日付が与えられた「津軽海峡」（『春と修羅』補遺）に「向ふに黒く尖った尾と／滑らかに新しいせなかの／波から弧をつくってあらはれるのは／水の中でものを考えるさかなだ」と登場する。「船員」が「少し笑って」「私の問を待ってゐる」、いるかの外見、様子、「いるかは水からはねあがる／そのふざけた黒の円錐形」などと描かれている。一方、恒例となっていた花巻農学校の修学旅行では、一九二四（大正一三）年五月一八日から二三日には引率者として同行しており、『新校本宮澤賢治全集』第十四巻に「〔修学旅行復命書〕」も残されている（交代で留守番の年もあった）。

「銀河鉄道の夜」〔初期形一・二〕に現れて、〔初期形三〕以降出現しなくなってしまう「いるか」のエピソードはそれまでとして、ここで見過ごしがたい「〔或る農学生の日誌〕」のモチーフ・エピソードに「お守り」がある。

「一九二五、五、一八、」の修学旅行出発の日の記述。「汽車は闇のなかをどんどん北へ走って行く。盛岡の上のそらがまだぼうっと明るく濁って見える。黒い藪だの松林だのぐんぐん窓を通って行く。北上山地の上のへりが時々かすかに見える。／さあいよいよぼくらも岩手県をはなれるのだ。／うちではみんなもう寝ただらう。祖母さんはぼくにお守りを借（ママ）してくれた。さよなら、北上山地、北上川、岩手県の夜の風、今武田先生が廻ってみんなの席の具合や何かを見て云った。」という中にお祖母さんの貸してくれた「お守り」が登場する。祖母は、彼を修学旅行に出してやれるかどうか父が悩んでいたとき、両親も伊勢詣りさえしない、祖母も「伊勢詣り一ぺんとこゝらの観音巡り一ぺんしただけこの十何年死ぬまでに善光寺へお詣りしたいとそればかり云ってゐるのだ」云々と、父の苦しさや遠慮の理

由として語られていた。その祖母の「お守り」だから、旅の安全を祈る意味はいっそう深いものがある。だが、「いるか」の出現に引かれて「お守り」を重ねたとき、「津軽海峡」を包む「オホーツク挽歌」群における北海道・樺太の旅の表向きの目的に関わった二人の卒業予定生徒にまつわる「お守り」が、私にはどうしても思い出されてならないのである。

大正一二年七月三一日に北海道・樺太旅行に出掛けた公的な目的は、翌大正一三年三月卒業予定の生徒、瀬川嘉助、杉山芳松の就職を王子製紙株式会社樺太分社勤務の細越健（盛岡高等農林学校時代の友人）に依頼するためだった。無事就職したひとりの杉山は深く恩義を感じて、しばしば便りを寄せ、時には贈答の品を送ることもあったらしい。受け取った書簡も大切に保存し、いま全集に三通が残されているが、大正一四年四月一三日付書簡では、賢治は来春の教師退職の意向を漏らしたのち、「あなたがほんたうに成功ができるなら、それはあなたの誠意と人を信ずる正しい性質、あなたの巨きな努力によるのです。これからはもうわたくしが手紙を二通書いたとか、友だちにたのんだとかそんな安っぽいことを恩に着てゐるやうには考へずに、明るく気持ちよく友だち付合ひをして下さい。／いつかお話だったお守りを亦二通お送りいたします。どうかどなたかほんたうにそれのなければならない人へあげてください。」という文面が見られる。

この「お守り」二通の実体は長らく不明だったが、賢治生誕百年の一九九六年に杉山芳松の甥にあたる寿直氏が遺品を所蔵されていることが知らされ、お尋ねして見せていただくことが出来た（7月11日）。謄写版印刷の「稗貫農学校精神歌」・通知表の他に、『新校本宮澤賢治全集』第十四巻で「〔配布用経典印刷物〕」として掲載されているものと同じ「南無妙法蓮華経如来寿量品第十六」の一部（末尾のいわゆる自我偈の部分）が残されていたが、おそらくはこれが「お守り」として賢治から送られたものだっただろう。

切実な思いの末に参加することが出来た農学生の修学旅行の「お守り」は、卒業生杉山芳松に対しては、人生の旅の「お守り」として法華経の本質を集約するとされている自我偈を表していた。もしかすると、書簡中にいう「どなたかほんたうにそれのなければならない人」は、もう一人の卒業生瀬川嘉助だったかも知れない。瀬川は在学中に操行面で問題を含むところなしとしない生徒だった。賢治が杉山を介して瀬川への心配りを怠らなかったことは間違いないだろう。

いずれにせよ、いまこの「お守り」を教師が教え子に与

える正しき信仰への指南書とか、信仰の真実を象徴する護符、あるいは人生という旅を歩む通行保証書のようなものと見なすならば、それは、「銀河鉄道の夜」〔初期形〕での、「ほんたうの天上へさへ行ける切符」「どこでも勝手にあるける通行券」に相当するものではなかろうか。〔初期形三〕では、ジョバンニの決心に答えてセロのやうな声の言う「切符」、「夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない」その時の「たったひとつのほんたうの切符」ということになる。そして、それはブルカニロ博士が実験を通じて与えてくれたものなのであった。

3、「〔或る農学生の日誌〕」と「銀河鉄道の夜」②

「銀河鉄道の夜」最終形でも、ジョバンニの切符が登場したときには、〔初期形〕を引き継いだまま「ほんたうの天上へさへ行ける切符」「どこでも勝手にあるける通行券」として物語の中で機能し始める。しかし、最終形ではジョバンニより上位の審級に属する存在を失って、目覚めた夢の中での「切符」に他ならなかったことになる。その超越的な機能は限定付きの夢の枠組みの中だけのものになるのである。

なぜ作品はそのような論理に作りかえられねばならなかったか。その根拠を「〔或る農学生の日誌〕」と構想メモに探ってみよう。

「〔或る農学生の日誌〕」の主人公「ぼく」は、農学校のさまざまな仕組みや教師の振る舞いを、かなり冷めた眼差しで見ている。時には明瞭に批判的である。桜の木の支柱取りの指示に対して、「桜が咲くのに支柱があっては見っともない」という菊池先生の理屈付けを欺瞞的だと見なしている（四月一日）。最も象徴的なのは、四月八日の記事で「今日は実習はなくて学校の行進歌の練習をした。僕らが歌って一年生がまねをするのだ。けれどもぼくは何だか圧しつけられるやうであの行進歌はきらひだ。何だかあの歌を歌ふと頭が痛くなるやうな気がする。実習の方が却っていゝくらゐだ」と評している。

これを作者宮沢賢治の伝記と重ね合わせてみれば、「愉快な明るいもの」（「春と修羅　第二集」「序」）、「いちばんやり甲斐のある時」「その頃はなほ私には生活の頂点でもあった」（昭和五年四月四日、高橋武治あて書簡）とも振り返りうる、楽しく充実していたと見なしうる農学校教諭時代を、別の立場から、むしろ違和感をもって見ていた生徒の眼差しによって評価させることで自己批判的に見つめ直していると言うことができるであろう。そして、当時は

充分に視野に入れることができなかった、別の立場からの現実世界の描出という意図は、「〔或る農学生の日誌〕」にあわせて残されている構想メモ「アドレスケート　ファベーロ／ノベーロ　レアレースタ　黎明行進歌」にさらにはっきりとにじんでいると思われる。

この構想メモは「丸善特製　二」六百字詰原稿用紙（セピア罫）三枚に書かれたものだが、この用紙は『春と修羅』印刷用原稿に用いられた他、「銀河鉄道の夜」〔初期形三〕に多く使われている。使用時期としては大正一四年ころ以降、かなり後までストックがあったようで、昭和五年頃にも用いられた例がある。このメモと現存する草稿「〔或る農学生の日誌〕」との先後関係は微妙で、あまりよく判断できない。

角書きの「アドレスケート　ファベーロ／ノベーロ　レアレースタ」は、原子朗『新宮沢賢治語彙辞典』（１９９９年7月、東京書籍）によればエスペラント語で（多少の誤りがあるか？）「青少年向物語／写実小説」とのことである。冒頭には「岩手県稗貫郡湯本村日居城野／徳松長男　栂沢舜一／明治四十二年八月一日生」「父は水田一町一反畑地一町三反と、林野三反歩原野一反歩母屋外三棟を有する自作農、前二年続ける旱害のため総て抵当に入れり、」と主人公の紹介がある。以下、家族関係、「一千九百廿年十七才」「四月　稗貫農学校第三学年」として、年譜形式で、「一千九百二十七年　十九才」「十二月」まで、「月」のみで空白の部分も含みつつ、項目が記されている。現存稿の「〔或る農学生の日誌〕」と重なるところも重ならないところもあり、より細かな事項の記述も多い。すぐに目につく点では、冒頭の父の家産が「総て抵当」に入っていることで、階層分解の危機にさらされている当時の農村の自作農の状況が明瞭に記されていること、そして、妹や母（推敲途上では弟や姉でもある）の死が記されたりして、いっそう困窮の度が深くなっているように見えることである。この構想メモに従って作品化することは、「写実小説」としてのリアルな現実の描出が求められ、相当の集中力を必要とした筈である。これが描き通されなかったことについてどのような事情があったかは、残念ながら具体的なことはわからないが、リアルに貧窮を問い詰めようとする意図は、ひきつづく賢治の文学的成熟に資するところがあったに違いない。

もうひとつ、気づいたことを記しておけば、栂沢舜一の誕生日「八月一日」である。これは賢治の戸籍上の（正式の）誕生日と同じなのである（注）。推測の域を出ないが、何らかの精神的共感を重ねる意識がない限り、普通なら自身の生年月日と同じ日付にすることは避けるのではないかと思

われる。

むすび

ここから先は、晩年の「ポラーノの広場」が「ポランの広場」から形成されてくる経緯、「グスコンブドリの伝記」が「グスコーブドリの伝記」へと転じていく経緯、晩年の文語詩の推敲過程が示すものなどと同調するものとして、総合的に考察するしかない部分を含むのだが、「〔或る農学生の日誌〕」とその構想メモで志向されていた現実生活上の「写実小説」的試みが、「銀河鉄道の夜」（最終形）における「午後の授業」「家」を中心とした現実生活上のジョバンニの町での暮らしを引き寄せ、そこに接続するものとして、天上の旅を地上と重ね合わせ、交錯させ、ジョバンニ自身自らの肩に背負って生きるという、〔初期形三〕とは質を異にした重層的な表現構造をもたらすことになったのである、とひとまずは結んでおくことにしたい。

先に残しておいた課題、「銀河鉄道の夜」最終形の末尾近く、ジョバンニがカムパネルラの父を前にして口ごもり、何も言えなくなってしまう、その時、ジョバンニの心の中に渦巻いていたものは何であったか？　ジョバンニは「のどがつまって」、「胸がいっぱいで」言えず、作者も言葉で説明しなかったものを、あえて追究するのはもちろん難しいし、また野暮な議論かもしれないので、まずは迂路を辿ってみよう。すなわち、もしジョバンニがいま考えていたとおり「ぼくはカムパネルラの行った方を知ってゐますぼくはカムパネルラといっしよに歩いてゐたのです」とカムパネルラの父の博士に向かって訴えかけたとしたらどうだろう。博士は一瞬怪訝な表情になり、事情を問いただし、ジョバンニの説明に、結局は、ああ、夢を見ていたんですね、と決着をつけることになるだろう。

言い換えれば、ジョバンニが口ごもって語りかけなかったことによって、「銀河鉄道の夜」最終形の作品としての論理は、目をさますまでの間のあの旅の体験が眠りの中の出来事でありながら、目覚めたあとの現実と切り離された全く別の世界だったとされないように、ジョバンニの深層心理の中に深く生きつづけるようにと守り通したのである。

作者の論理としてさらに言い換えれば、死の門をくぐって次生へと向う途上を歩む人々を乗せた銀河鉄道の旅を経験させることによって、生と死の境界を越えて、両者を貫いてこの世の生を歩む務めを背負う思いを抱くことになった少年ジョバンニの肖像を、宮沢賢治は読む者に提示することができた。

「銀河鉄道の夜」〔初期形　三〕のブルカニロ博士とジョ

バンニの関係は、いわば宮沢賢治と杉山・瀬川の関係に相応し、現実的生活の枠組みを踏み台にして死生を一貫する歩みを求めさせる「銀河鉄道の夜」最終形の枠組みは、「〔或る農学生の日誌〕」に見られるような、若き日の理想主義的な振る舞いを、厳しく自己批評しうる現実認識への眼差しを獲得する試みを介してはじめて得られたものであった。

最後に、「はじめに」で「モデル論議などを意図するものではない」と記しておいたことについて、念のため付言しておきたい。ジョバンニとカムパネルラの別れを巡って、早くからそこに賢治と妹トシとの関係、賢治と友人保阪嘉内との関係を見る議論が重ねられてきた。前者は、あくまで「信仰を一つにする」二人の間が、〈生〉と〈死〉の境界によって引き裂かれる体験によって生じた事態の意味を問うもので、決してモデル論議を意図したものではなかったと思うが、それに対して、賢治と保阪の間にあった思想（信仰）上の別れの経験の反映こそが作品を作らせているという主張が提出されるに至って、その後に一種のモデル論議と見られる要約を登場させることになったとおぼしい。〈死〉によって引き離されて地上に生きることの自覚を迫られるジョバンニの像としては前者の方がふさわしいが、いずれにしても、作者の生涯の重要な体験が影を落とすのは当然のことであって、問題はそれらが実際の作品表現行為を、具体的、実践的にどのように導いているかなのである。それゆえ、〔初期形　三〕に関連して杉山や瀬川などの名を上げても、それをモデル論議のレベルで扱った積もりは全くないのである。

注

現在の多くの年譜では、賢治没後の親族の証言をもとに、小倉豊文が考証した明治二十九年八月二十七日が流通している。小倉の考証は妥当性を備えていると考えて良いと思われるが、『新校本宮澤賢治全集』第十六巻（下）「年譜篇」では、戸籍上の明治二十九年八月一日を併記した。

実情として、学校関係の修業証書、卒業証書類は戸籍上の記載に沿っているし、自筆の「〔稗貫農学校就職時提出履歴書〕」も、当然のことながら戸籍上の日付を記している。賢治自身が、公的にこの日付を生年月日としていたことは否定できないから、併記しておく必要があると判断したのである。

（くりはら　あつし・実践女子大学教授）